高校生文化と進路形成の変容（その2）

— 1979年調査との比較を中心に —

（1）生徒文化

堀 健志（東京大学大学院）

大多和直樹（東京大学）

（2）進路形成

耳塚寛明（お茶の水女子大学）

（0）はじめに

本報告は、今大会における、岩木秀夫、樋田大二郎、金子真理子「高校生文化と進路形成の変容（その1）」と、同一の調査に基づいている。「調査のねらいと特徴」等については、重複を避けるため省略するので、この報告要旨集録の該当箇所を参照してほしい。

A. 本研究の背景＝1979年調査

本研究の目的は、1979年に実施した「高校生の生徒文化と学校経営」調査（以下「79年調査」）を、ほぼ同一の対象に対して同一の方法によって、再度実施することによって、その後の高校生文化と進路形成の変容を、『トラッキングの弛緩』を主たるキーワードとして探ることにある。

79年調査は、①文書蒐集と聞き取りによる学校経営・組織調査、②教員集団の対生徒パースペクティブを扱った教員対象の質問紙調査、③高校生文化（価値観と行動様式）、進路意識を中心とする生徒対象の質問紙調査から構成され、結果は東京大学教育学部紀要第20,21巻等に報告されている。これらを通して私たちが明らかにしようとしたのは、高校教育の普遍化に伴って完成した、高校生文化と進路形成の「秩序」、すなわち学校ランクに応じて生徒文化が形成され、また生徒の進路選択が枠づけられる「トラッキング」のメカニズムだった。「高校生の生徒文化と学校経営」調査がとらえたのは、この人材の社会的選抜における日本の構造にほかならない。

B. 高校教育の社会学的研究の展開と

高校教育の変容・制度的環境の変化

80年代における高校教育の社会学的研究は、多様な関心からさかに行われた。それらは一見多様なベクトルを持っているように見えるものの、高校ランクによって、高校教育の機能・構造・過程をとらえようとする基本的枠組み、すなわち「トラッキング・パースペクティブ」を共有していた。

しかし、こうした研究者側のトラッキング・パースペクティブを揺り動かす変動が、研究対象である高校

教育の側に生じつつある。第一に、個性化・多様化を中心とする教育理念が、高校教育政策や教育現場に浸透している。総合学科を含む新タイプの高等学校への再編・新設はその典型である。第二に、18歳人口の急減期を迎え、高等教育進学をめぐる状況や高卒労働市場も変貌している。第三に、よりマクロな状況変化として、消費社会化の趨勢が高校生の生活や意識を変質させている。これらは、高校生文化と進路選択行動を規制していたトラッキング・メカニズムを弛緩させ、かつては見られなかった多様な現象を惹起している。学校ランクによって生徒文化の特質と問題点、進路形成をとらえることを可能としてきた枠組みは、説明力を失いつつあるのだろうか。私たちが本研究に着手した主たる課題意識は、こうした「トラッキングの弛緩」とでもいうべき高校教育の構造変動の様相をとらえることにある。

C. 1997年調査のねらいと特徴

（省略＝「高校生文化と進路形成の変容（その1）」を参照）

D. 79年調査・97年調査の概要

1997年度に実施した「高校生文化と進路形成の変容調査」では、79年調査の対象校と同一の学校に加えて、それらの高校と同一地域にある4校の高校を新たに対象校に追加して、ほぼ同じ内容の聞き取り調査と生徒・教師対象質問紙調査を実施した。但し、今回の報告では、変化を明らかにするために、両年度ともに調査を実施した11校のみを分析対象にしている。

1) 調査対象県および分析対象校

a) A県、東北地方、上位校（普通科）1校、中位校（普通科）2校、専門校2校。

b) B県、北陸地方、上位校（普通科）2校、中位校（普通科）2校、専門校2校。

2) 調査対象者および調査内容

a) 学校調査（聞き取り調査） 79年11・12月、97年10・11月に実施。

(1) 学校長、教頭に対する学校経営方針および学校全体の概況に関する聞き取り調査

(2) 教務主任、進路指導主任、生徒指導主任に対し、

それぞれの校務分掌領域に於ける教育の実態および方針に関する聞き取り。

b)生徒対象質問紙調査：各高校2年生4クラスに対する質問紙調査。79年11・12月、98年1・2月に実施。

c)教師対象質問紙調査：各校全教員に対する質問紙調査。79年11・12月、98年1・2月に実施。

d)生徒対象プレ・インタビュー調査：97年調査のみ実施。A県4校を抽出、各10名対象。

※なお、97年調査では近年の変化を念頭に置いて質問の追加・修正を行っている。

3) 分析対象者数

生徒対象調査：両年度とも1校につき125名を無作為抽出、合計2,750名。

教師対象調査：79年度が604名、97年度が524名、合計1,128名。

E. その他

1) 詳細なデータは、当日配布する。

2) 本研究の報告は、本報告と次の報告とに分けて行っている。岩木秀夫、樋田大二郎、金子真理子「高校生文化と進路形成の変容(その1) 1979年調査との比較を中心に」

3) 本調査は、文部省科学研究費の助成を受けて実施した。〈基盤研究(B)(1)「高校生文化と進路形成の変容—1979年調査との比較によるトラッキングの弛緩を中心に—」(代表：樋田大二郎)〉

(1) 生徒文化

A. 学業へのコミットメント

本項では、生徒の学業へのコミットメントをとりあげ、二つの調査の間に、それがどのように変化し、それをめぐって学校グループ間の関係がどのように変化しているかについて明らかにする。生徒の学業へのコミットメントというとき、そこには少なくとも三つの位相を設定することができる。それらは勉強時間(実態)、勉強に対する関与(自己評価)、学校に対するパースペクティブ(意識)である。こうして分節することによって、生徒の学業へのコミットメントのなかで、何がどのように変化しているのかを明らかにすることができるだろう。

以下ではまず単純集計レベルで両年度の調査結果を比較して、生徒の学業へのコミットメントの全体的変化を示す。次に、学校ランク別に両年度を比較することによって、各ランクに特徴的な変化を記述する。最後に、トラッキングの弛緩について検討する。

1. 単純集計にみる学業コミットメントの変容

①まず、高校生の勉強時間は短縮傾向にあるといえる。「ほとんどしない」と回答した者が増加し、逆に「3時間以上」の者が減少している。学校ランク別に見てもすべての学校グループでこの傾向は変わらないが、特に、専門学校で「ほとんどしない」者が8割弱を占めるようになった。また、勉強時間の減少幅が最も大きかったのは中位校であった。

②次に、生徒の勉強への関与であるが、それは概して低下しているといえる(表1)。それは次の変化にあらわれている。まず、〈勉強からの疎外〉が強まっている。例えば、それと関連するA、B、C、Dといった項目は高い回答率を維持している。くわえて、「勉強につい

ていけない」者が増加し(E、F)、勉強することに対して疑問を持つ者も増加している(A)。勉強に対する疎外的な関与は、今日の高校生において、ますます強まっていることが分かる。次に、高校生にとって、成績が存在証明の媒体ではなくつつあることが分かる。成績へのこだわりに関する項目のうち、G、H、Iのような、他者との関わりにおける成績の重要性を尋ねた項目で減少しているのである。これを言い換えれば、〈成績アイデンティティの希薄化〉ということになるだろう。ただし、成績へのこだわりが弱まって知的好奇心が高まったというわけではない。Lが低下し、Mが低水準のままであることは、むしろ〈学校的な知への好奇心〉が薄れていることを示している。弱まったのは成績へのこだわりではなく、恐らく、好(高)成績への欲望であると考えられる。つまり、成績へのこだわり方が変わったと考えられるのである。J、K

表(1)A-1: 勉強への構え×年度	79年	97年	*
A なぜ、こんなことまで勉強しなければならないのか疑問を感じる	71.0	81.7	0.14
B 高校での勉強は、趣味・関心にあわない	55.3	56.9	0.03
C 試験が終わると勉強したことをすぐ忘れてしまう	80.4	81.9	0.02
D いくら勉強しても、大切なものが身につかない	84.4	83.1	-0.02
E 教科書の内容がむずかしすぎ、ついていけない	30.1	43.3	0.36
F 先生の授業の進め方が早すぎ、ついていけない	37.3	44.1	0.17
G 先生や親の期待にこたえるために、勉強	64.7	47.9	-0.30
H よい成績をとると、優越感を感じる	42.2	37.3	-0.12
I 他人の試験の成績が気になる	49.2	44.1	-0.11
J いまの自分の成績に満足している	7.8	12.3	0.45
K 落第しない程度の成績でいいと思う	31.1	42.5	0.31
L 授業で、さらに詳しいことを知りたくなる	58.6	47.9	-0.20
M よい成績よりも、授業内容を理解できるほうがうれしい	27.3	29.0	0.06
N 家できちんと勉強するほうだ	12.1	16.9	0.33
O 先生の授業を熱心に聞いている	37.3	47.5	0.24
P わからない点はそのまましておかない	33.4	36.1	0.08

*=(97-79)/(79+97)/2

表(1)A-2: 学校に対するパースペクティブ	79年	97年	*
A 授業での先生の説明は、表面的でものたりない	56.1	42.3	-0.28
B 現在の高校での勉強は暗記中心だ	87.3	77.9	-0.11
C 努力すれば、だれでもよい成績をとることができる	89.6	80.1	-0.11
D 高校生である以上、勉強すべきだ	71.6	64.2	-0.11
E いまの学校の試験では、本当の能力ははかれな ない	81.5	74.3	-0.09
F 高校での勉強は、将来、職業や生活に役立つ	42.3	39.8	-0.06
G 勉強をなまけて成績の悪い者が、将来、損をする のはしかたないことだ	59.5	57.9	-0.03
H いまの日本の社会では、学校での成績によって 将来が決まる	78	78.1	0
I 学校では勉強のできる生徒が幅をきかせている	29.4	29.9	0.02
J 現在の高校での勉強は、受験に役立つだけだ	65.2	67.6	0.04

の増加は、好成绩への欲望が低減したこと、「そこそこの成績をとっていれば十分」といった〈現状肯定的な成績へのこだわり〉が強くなったことを示しているのではないだろうか。あえていうなら、勉強の中身（実質）はともかく、高望みせず必要な程度の成績（形式）さえとればよいということになるだろう。こうして生徒の勉強への関与は弱まっていることが示唆されるが、N, Oが増加しているところを見ると、生徒自身は〈主観的に勉強熱心〉だと考えている。この二つの傾向は一見矛盾しているが、しかし、勉強熱心というときの基準が低くなったと考えれば理解可能な現象であろう。

さらに、学校ランク別に特徴的な変化を挙げておく。上位校の場合には、E, Fの「ついていけない科目がある」、Kの「落第しない程度の成績でいい」、N「家でもきちんと勉強する」の増加が目立っている。つまり、〈勉強からの疎外〉と〈現状満足〉が強まっており、〈主観的には勉強熱心〉だと考える者が増えた。中位校では、K, Nの増加と、Hの減少が目立ち、〈現状満足〉〈主観的には勉強熱心〉への変化によって特徴づけられる。最後に、専門校はG, Lの減少、Jの増加が目立ち、〈成績アイデンティティの希薄化〉や〈現状満足〉〈学校知への好奇心の低下〉が見られる。また、わずかな変化ではあるがほかの学校ランクとは異なって、「高校での勉強が趣味・関心にあう」(B)と考えるものが増加している。〈勉強からの疎外〉という趨勢のなかでも、専門校の生徒たちには学校での勉強に関心をもつ契機があるのかもしれない。

③三つ目に、学校に対するパースペクティブを検討しよう。表.(1) - 2は、それに関連する質問項目を変化の大きい順に並べたものである。それほど変化が大きいわけではないが、まず、A, B, Eのような「学校の勉強は表面的である」といった学校知への批判的な見方を採用する生徒は減少している。とりわけ、後退しているのは授業が表面的であるという理由でなされる〈教師に対する批判〉である(A)。他方で、高校

での勉強・試験が表層的であるといった見方(B, E)は今でも多くの者が抱いており、高校での勉強は受験に役立つだけだと考えている割合に変化はほとんどない(J)。したがって、学校的な知そのものへの批判的な見方は今日の高校生にとっても支配的な見方であり続けている。とはいえ、変化に注目するとき、〈学校での勉強や試験に対する批判〉的な見方(B, E)が後退していることが分かる。次に、業績に基づいて生徒を選抜する機関として学校を正統化してきた〈業績主義〉的な見方(C, G, H)は総じて高い回答率を保っている。とはいえ、この見方もまたその支持を失いつつある。そして、この〈業績主義〉を支える高校生像、すなわち高校生の本分は勉強であるといった〈規範的な高校生像〉も同様に多くの者が正当視しているものの、支持を失いつつある(D)。また、生徒から見て、学校の勉強と将来の職業とのレリバンスは決して高いとはいえない(F)。

学校での勉強・試験を〈業績主義〉の機関としての学校を存立させる実践と捉えることができる。そうであれば、〈業績主義〉に適合的な見方を支持しながらも、学校およびそこでなされる勉強・試験を批判的に捉えるというのは矛盾をはらんでいる。そして、かつてと同様に今日の高校生もまた、この矛盾したパースペクティブをもっていること自体に変化はない。ただし、変化がないわけではない。〈学校知への批判〉や〈業績主義〉的な見方のわずかな後退は、両者が共存するという矛盾の解消を物語っているのだろうか。この問いは検討を要するだろう。また、〈学校知への批判〉の矛先が、学校知の伝達を担い、生徒と直接的な関係を取り結ぶ教師に対して向けられなくなったことをどう捉えられるだろうか。すでに述べたように勉強への関与が変化したことによって、「授業がものたりない」と考えるほど「余裕」がなくなったと推測される。あるいは、教師—生徒関係の変化の一表現であるということもできるだろう。

さらに、学校別に変化の特徴を見ると、〈教師に対する批判〉は軒並み減少している。上位校ではほかのランクとは異なり、生徒から見て学校と職業とのレリバンスがわずかに高くなった。また、高校生の本分は勉強といった規範的高校生像が相変わらず高く支持されていることは上位校に特徴的である。中位校は全体的な変化と軌を一にしている。最後に、専門校ではD, E, Fの減少が目立つ。このことが示しているのは、規範的高校生像が支持を失いながら、〈学校への批判〉が後退しつつあるということである。そして、専門校の生徒から見て、学校と職業とのレリバンスが低下した

ということである。

2. 学校ランク間関係の変容

とはいえ、変化の度合いは学校ランクごとに異なっているし、そもそも学業コミットメントの度合い自体が学校ランクごとに異なっている。そこで、学校ランク間の関係がどのように変容したのか検討するために、学業コミットメントを測定する尺度を作成した。学校ランク間の関係を分析するにあたり、トラックの〈差異化-同質化〉・〈分節化-あいまい化〉の異なる二つ

の指標を設定した。(差異化-同質化)とは、レンジによって与えられ、この数値が大きいほど差異化、小さいほど同質化ということになる。(トラック分節化-あいまい化)は、相関比によって表現され、これが大きいほど分節化、小さいほどあいまい化ということである。そして、トラッキングが弛緩するというとき、〈同質化〉および/または〈あいまい化〉を指すものと捉えよう。これらの指標を用いて、学業コミットメントのそれぞれの位相について、トラッキングの弛緩について検討する(詳細は、当日配布資料)。(堀 健志)

B. 高校生活

この項では、①学業以外の高校生の行動について、1. 友人関係、2. 規則に対する意識、3. 学校生活、4. 高校生文化に焦点づけて見ていき、次に②トラッキング構造の変化を学校適応の項目について見ていく。

①全体的傾向の変化

1. 友人関係(Q9)

表(1)B-1に示すように、高校生の友達づきあいは広がりを持ってきている。ここでは、学校外の親しい友人が増え(B)、学校のちがう友人が増え(C)、異性の友人がいるものが多くなる(D)など、交際範囲が拡張していることが伺える。その一方で、友人の家に遊びに行くという行動は少なくなり(G)、つきあいの範囲やあり方、遊びがなされる空間に変化が生じつつある可能性を指摘することができる。

	「はい」に答えた人の割合	
	79年	97年
Q09A 学校の中に親しい友人がいる	92.1%	94.0% *
Q09B 学校の外に親しい友人がいる	85.4%	92.2% ****
Q09C 学年のちがう友人がいる	55.2%	65.5% ****
Q09D 異性の友人がいる	47.3%	66.4% ****
Q09E 学校外の友人とのほうが気が合う	36.7%	35.2%
Q09F 休みの日に友人とあそびこくことがよくある	55.4%	53.8%
Q09G 友人の家へよくあそびこく	49.6%	40.1% ****
Q09H 友人とは表面的なつきあいが多い	43.3%	39.3% **

****: p<0.001 ***: p<0.01 **: p<0.05 *: p<0.1

2. 規則にたいする意識(Q12)

校則は校則だから当然守るべきだ(A)というような規範を内面化することによる規則遵守や、集団生活をうまくやっていく(D)というような、秩序維持・協調性の確保のための遵守が減った。これにたいして、みんなから白い眼で見られないため(E)、先生によく見られるため(F)、また、注意や罰をおそれてなど(C)、自らに向けられた視線を意識し、サンクションを回避するための規則遵守が増加した。(表(1)B-2)

すでにみた校則は当然守るべきだ(A)が54%であり、「校則がなくてもあまり問題は起こらないと思う」(G、97年のみ)が58.6%、校則はあまり気にしていない(H、

同)が77.2%であることからかんがみて、97年度の生徒の意識においては、校則の重要性や、学校生活を支配し拘束させられる規範としての意味あいが低下する一方、規則が他人の視線やサンクションと結びつきながら、生徒たちは協調性のためにではなく、自らが問題を起こすことを回避するために規則を遵守するという方向性を孕んでいると解釈できよう。

	「はい」に答えた人の割合	
	79年	97年
Q12A 校則は校則だから当然守るべきだと思う	71.1%	54.3% ****
Q12B きちんとした社会人になるために規則は守るべきだ	75.4%	72.8%
Q12C 注意や罰を受けるから仕方なく規則に従っている	44.1%	50.0% ***
Q12D 集団生活をうまくやっていくために規則を守るべきだ	85.7%	73.4% ****
Q12E みんなから白い眼で見られないために規則を守るべきだ	21.7%	27.6% ****
Q12F 先生からよく見られるためにも規則に従っている	21.8%	27.8% ****
Q12G 校則がなくてもあまり問題は起こらないと思う		58.6%
Q12H 校則や規則はあまり気にしていない		77.3%

****: p<0.001 ***: p<0.01 **: p<0.05 *: p<0.1

3. 学校生活(Q17, Q21)

表(1)B-3にみるように、授業の充実度にかんする意識(Q17A,B,C)が変化していないのにたいして、その他の授業以外の活動の充実度や学校適応にかかわる意識(Q21)にはかなりの変化が見られる。

特別活動の充実度では、文化祭・体育祭の充実度が著しく落ち込んでいること(F)が目立つ。その一方で、より日常的な活動である部活(D)やロングホームルーム(C)の充実度が上がっているという傾向が見られる。

学校適応にかかわる意識(Q21)では、矛盾を孕んだ変化が起きている。ここでは、まず、学校のやり方に不満を感じる(F)という者の割合が74%から49%へと大きく減少したのをはじめとして、クラスにとけ込めない(B)、ほかの高校にかわりたい(A)等の意識が減り、むしろ学校適応が進んだという方向性が見られる。ところが、その一方で、学校生活が楽しい(I)、はりあいを感じる(E)、その学校の生徒であることが誇りである(H)等の項目も同時に減少している。このように、矛盾を孕んだ二つの動向が同時にみられ、このことは生徒

たちに学校が不満もないがはりあもない場所として捉えられ、かれらにとっての学校の重要性が低下していることを物語っているのかもしれない。

表(1)B-3	「はい」に答えた人の割合	
	79年	97年
Q17A 英・国・数・理・社の授業が充実している	34.1%	31.4%
Q17B その他の授業、実習が充実している	44.2%	45.8%
Q17C ロングのホーム・ルーム活動が充実している	19.0%	23.5% ***
Q17D 部活動が充実している	41.8%	47.6% ***
Q17E 生徒会、委員会活動が充実している	10.1%	8.1% *
Q17F 学校行事(文化祭、体育祭、合唱大会、スポーツ大会)	72.6%	55.5% ****
Q17G 学校での友人とのつきあい	84.5%	82.1% *
Q21A できることならほかの高校にかわりたい	50.8%	44.0% ****
Q21B 今いるクラスにとけ込めない	31.7%	24.1% ****
Q21C 学校を休みたいという気持ちになる	66.7%	62.2% **
Q21D 早く社会に出て働きたい	52.2%	47.5% **
Q21E この学校での生活にはりあを感じる	45.7%	31.1% ****
Q21F この学校のやり方に不満を感じる	74.0%	49.8% ****
Q21G 学校にいる時よりも学校の外での生活のほうが楽しい	75.8%	63.5% ****
Q21H この学校の生徒であることは誇りである	51.6%	37.4% ****
Q21I 学校生活は楽しい	73.6%	59.2% ****
Q21J 授業以外での先生との接触に満足している	19.8%	27.7% ****
Q21K 先生に親しみを感ずる	34.7%	31.6% *

****: p<0.001 ***: p<0.01 ** : p<0.05 * : p<0.1

4. 高校生文化(Q13)

表(1)B-4	「はい」に答えた人の割合	
	79年	97年
Q13A 文学・哲学に興味・関心がある	37.4%	31.8% ***
Q13B ニューミュージック・ロックに興味・関心がある	82.5%	80.3%
Q13C ゲームセンター・パチンコに興味・関心がある	36.0%	31.5% **
Q13D 茶髪・ロン毛・パーマ・リゼントに興味・関心がある	26.5%	30.2% **
Q13E オートバイ・車に興味・関心がある	34.4%	44.1% ****
Q13F 喫茶店に興味・関心がある	47.7%	20.3% ****
Q13G 異性に興味・関心がある	70.0%	66.5% **
Q13H 喫煙に興味・関心がある	25.0%	14.5% ****
Q13I 飲酒に興味・関心がある	41.5%	40.7%
Q13J ひとり旅に興味・関心がある	74.5%	62.2% ****

****: p<0.001 ***: p<0.01 ** : p<0.05 * : p<0.1

表(1)B-4(省略)からゲームセンターパチンコ(C), 喫茶店(F), 喫煙(H)で関心を持つ人が減少し、茶髪、ロン毛(D), オートバイ・車(E)で増加、飲酒(I)でほぼ変化なしという結果となった。このように79年時に逸脱性

を測定して設けられた項目において、変化の方向がまちまちであることは、青年期に特有の行動が時代によって普遍ではなく、意味を変えてきていると考えられよう。

また、逸脱的行動でない文学・哲学(A), ニューミュージック・ロック(B), 異性(G)では、分析の結果、79年から97年の間には男子の変化は有意でないのにたいして、女子に有意な変化が見られるという特徴がみられた。

②学校階層間関係の変動

次に、このような動向の中で学校階層間の関係がいかなるものになっているのかについて考察する。ここでは、とりわけトラッキング研究において伝統的に考察の対象になってきた学校適応を中心に見ていきたい。

Q21に数量化Ⅲ類を適応した結果、固有値・相関係数ともに97年の方が若干大きくなっている。得られた第一根は学校適応の度合いを示しており、その第一根のケーススコアを年次毎、学校階層毎に集計・比較した場合、97年では、各トラック内の多様化の度合いを示す標準偏差が大きくなり、またトラッキングの分節化の度合いを差し示す相関比は減少した。これにより、学校適応の意味あいの微妙な変化を伴いつつ、先に見た学校の意味合いの希薄化ともいえる動向の中で、この項目にかんしてはトラッキングは弛緩する方向に変化してきたと見ることができよう。

発表当日は、さらに様々な項目において階層間関係の分析結果を報告し、その関係の変動あるいは不変動について考察を加える。(大多和 直樹)

(2) 進路形成

この項の目的は、次の2点にある。

A. 79年と97年の2時点間で、生徒の進路志望はどう変化したのか。

B. 2時点間で、生徒の進路志望を規定する構造は、どう変わったのか。とりわけ、そこにおける学校ランクの位置は、どう変容したのか。

この作業をとおして、進路形成面から、「トラッキングの弛緩」を仮説的キーワードとして高校教育の変容に迫るのがこの項のねらいである。

A. 進路志望の変化

A-1 全体としての進路志望の変化

まず、調査対象校全体としての進路志望の変化を記述する(表(2)-1)。主な変化は、①就職・家の手伝いの1割弱の減少と、②専各の微増であり、全体と

してみるとわずかな変化にとどまる。

A-2 学校ランク別にみた進路志望の変化

では、学校ランク別にみると、どう変化したのだろうか(表(2)-2)。

上位校では、国公立四大がわずかに減少したものの大きな変動はない。国公立四大進学校としての性格をほぼ維持した。中位校は国公立四大進路志望者6割(79年)が7割へと増加し、同時に他の進路志望が軒並み1割程度以下に減少することによって、国公立四大が支配的な進路志望といってよい状況となった。専門校では、7割を占めていた就職志望者が半数を切り、専各2割、四大15%と、進路の多様化が進展した。上位校と中位校では、国公立四大志向に収斂し、この意味ではトラックの持つ意味は類似してきた。これに対して、専門校=就職校の性格付けは崩れ、特定の進路と学校ランクの結びつきは専門校では弱まった。

表(2)-1 進路志望の変化

	調査年	進路志望						合計
		無回答	就職他	専・各	短期大学	私立四大	国公立四大	
	79	0.8%	29.1%	7.5%	3.6%	10.6%	48.4%	100.0%
	97	3.8%	20.0%	11.3%	3.9%	9.2%	51.9%	100.0%
全体		2.3%	24.5%	9.4%	3.7%	9.9%	50.1%	100.0%

Nは、各年度とも1375、合計2750

B. 進路志望を規定する構造の変化

ここでの問題は、高校生の進路志望を何が決めるのか、そこでの学校ランクの位置は79年から97年にかけて、どう変化してきたのかにある。発表要旨集録では、解答を要約的に示すために、数量化理論第Ⅱ類による分析結果を掲げておく(表(2)-3)。

進路志望(3分類、1.就職その他 2.専各、短大、3.四大)を外的基準とし、表にあげた学校ランクほか6変数を説明変数とする分析結果を要約すると、以下のようになる。

{第Ⅰ軸} 四大進学志望かそれ以外かの弁別

①進路志望の各カテゴリに与えられた数値を見ると、79、97の両年度とも、第Ⅰ軸は、四大進学志望かそれ以外かを弁別するための軸である。ただし、79年においては、専各短大が、四大と就職の中間に位置しているのに対して、97年は専各短大と就職がほぼ同じグループを形成している点が異なる。

②相関比は両年度とも高い値を示す。これらの変数による四大進学志望か否かの弁別は、一定程度成功している。データは省略するが、就職か進学かを弁別するという別の問題をたてて分析を行ってみると、相関比は79年から97年にかけて大幅に低下する。つまり、就職か進学かというセクションについては、このモデル以外の変数が介在するようになったが、四大進学か否かという選抜度の高いレベルでのセクションは、

表(2)-2 学校ランク別にみた進路志望の変化

学校ランク(3分類)	調査年	調査年		合計	
		79	97		
1 上位校	進路志望	-1 無回答	0.3%	3.7%	2.0%
		1 就職、家の手伝い	2.1%	1.9%	2.0%
		2 専門学校・各種学校	1.1%	1.6%	1.3%
		3 短期大学	0.0%	0.3%	0.1%
		4 四大(私立)	4.0%	6.1%	5.1%
	5 四大(国公立)	92.5%	86.4%	89.5%	
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	
2 中位校	進路志望	-1 無回答	0.4%	2.6%	1.5%
		1 就職、家の手伝い	10.0%	5.0%	7.5%
		2 専門学校・各種学校	6.6%	6.6%	6.6%
		3 短期大学	8.0%	3.4%	5.7%
		4 四大(私立)	17.0%	11.4%	14.2%
	5 四大(国公立)	58.0%	71.0%	64.5%	
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	
3 専門校	進路志望	-1 無回答	1.6%	5.0%	3.3%
		1 就職、家の手伝い	68.4%	48.6%	58.5%
		2 専門学校・各種学校	13.2%	23.2%	18.2%
		3 短期大学	2.0%	7.0%	4.5%
		4 四大(私立)	9.2%	9.4%	9.3%
	5 四大(国公立)	5.6%	6.8%	6.2%	
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	

Nは、上位校は各年度375、中位校と専門校は各年度500

表(2)-3 進路志望の規定要因(数量化理論Ⅱ類による結果の要約表)

外的基準	第Ⅰ軸		第Ⅱ軸	
	1979	1997	1979	1997
外的基準	進路志望(3分類) 1.就職その他 2.専各、短大 3.四大			
説明変数	学校ランク(3分類) 上位校、中位校、専門校 現在の成績(4分類) 下位、中の下、中の上、上位 中学卒業時の成績(4分類) 下位、中位、中の上、上位 父職(3分類) 専門技術管理、事務販売サービス、その他 父学歴(3分類) 中学他、高校、短大高専大学 母学歴(3分類) 中学他、高校、短大高専大学			
外的基準変数のカテゴリに与えられた数値(上段mean 下段SD)				
就職ほか	1.04 0.66	-0.97 0.76	-0.11 0.73	-0.18 1.02
専各短大	0.36 0.89	-0.81 0.84	0.51 0.78	0.32 1.01
四大	-0.60 0.63	0.58 0.62	-0.04 1.12	-0.01 0.97
相関比	0.74	0.72	0.18	0.15
偏相関係数	学校ランク: 57 父学歴: 15 高校成績: 11 父職: 06 中学成績: 02 母学歴: 02	学校ランク: 67 高校成績: 18 母学歴: 11 中学成績: 08 父学歴: 03 父職: 02	学校ランク: 15 父職: 06 高校成績: 05 母学歴: 05 中学成績: 05 父学歴: 01	母学歴: 10 中学成績: 08 学校ランク: 07 高校成績: 06 父職: 06 父学歴: 05
説明変数カテゴリスコア(省略)				

97年段階でもこのモデルによって十分説明可能なことを意味する。

③偏相関係数により、変数の規定力を観察する。学校ランクの規定力がもっとも大きいことは変化していない。学校ランク、高校での成績、中学卒業時の成績の規定力があがっており、この限りにおいて業績主義的選抜がより進行したように見える。ただし同時に、(父学歴の規定力が大きく下がったものの)、母学歴の規定力の上昇が見られる。

{第Ⅱ軸} 専各、短大か、それ以外かの弁別

①第Ⅱ軸は、専各、短大志望か、それ以外かの弁別である。両年度とも共通している。

②相関比は、両年度とも第Ⅰ軸と比較すると、きわめて低い値を示す。専各、短大進学志望か、それ以外かを弁別する力は弱い。このモデルに採用していない、つまりわれわれが進路志望を説明する際に用いてきた伝統的変数以外の影響力が、相対的に大きいものと推測できる。

③偏相関係数は全般に小さいが、ことに97年で小さな数値となっている。79年には、第1位学校ランク、第2位父職、第3位高校での成績等であり、学校ランクの規定力が群を抜いて大きなことが目立っていた。これに対して、97年は、第1位母学歴、第2位中学卒業時の成績、第3位学校ランクとなっている。学校ランクの影響力は97年で大幅に低下している。進路と学校ランクとの対応という、進路面での学校格差規範は、専各と短大への進学に関しては、崩れた。(耳塚寛明)